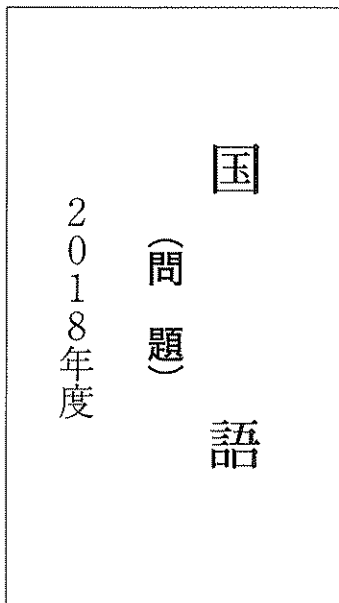




<2018 H30122023>

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～10ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に消し残しがないようによく消すこと。
- 5 記述解答用紙記入上の注意
 - (1) 記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
 - (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 - (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

(例)

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

↓

- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 9 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次のア・Bの文章を読んで、あとの問いに答えよ。

A

一八七七(明治一〇)年、上野恩賜公園で開催された(第一回内国勸業博覧会)は、その名称の通り、殖産興業を主たる目的とする国家的事業であったが、その会場内には、本邦で初めて「美術館」と名の付く施設が建造され、その中に書家の作品も陳列された。ただし、このときの出品区分によれば、書とは「書画」の一部を成すものとされており、詩画軸のような表現を代表とする東洋の伝統的な芸術観念が、主催者側の分類基準の中にあったものと推測される。重要なのは、当時の日本の言説において形成途上にあった美術概念の枠組みの中で、書作品が民衆の目に供されたという事実である。書に特殊な関心を持つ教養階級のサークル的な集まり(茶会や書画会)から、数多くの作品が「美術」という表現の広がりの中へ解き放たれる

a は確かに訪れていたのである。

しかし、そのように混沌として不定形な事態は長く続かなかった。「書画」という分類上の観念は「書」と「画」に明瞭に分節され、後者のみが「絵画」として美術の制度の中に安定した地位を築いていくことになるのである。他方の「書」は、「工芸」などととも長らく当時の美術の正道から周縁へと追いやりられ、国家を挙げての保護や振興という点においては、不遇の時期を迎える。書を専業とする表現者は美術家たりえなかったというわけである。その原因は、どこにあったのだろうか。

この疑問についてはより広い視野が開拓されてしかるべきだが、今日の美術史研究において一つだけはっきりと意識化されている事柄は、洋画家の小山正太郎が一八八二(明治一五)年に発表した「書ハ美術ナラズ」という論考が、当時の政府関係者の思考を代弁し、かつ束縛していたという観察であろう。『東洋学芸雑誌』の誌上で、小山は三ヶ月にわたって、書を以下のような論法で攻撃し、周到に美術の枠組みから排除していく。

書とは、音声言語を効率的に伝達するための「符号」にすぎず、美を運搬するわけではないから、美術表現と同列に置くことはできない。伝えたい内容が同一なら、「鳥跡」(漢字)は「鰲行」(アルファベット)に入れ替えることができる。むしろ両者の形態は異なるが、文字の形というものはその創造者が定めたのであって、いかに書き方を工夫しようとも、受け手に与える効果は変わらないのである。また、古来より人々が書を愛玩してやまない事実を以て、慣習的に美術の列に加えようとする態度が見られるが、人々が真に愛しているのは、実は、書の作品が持つ来歴であったり、詩の意味内容の豊かさであったり、あるいは古物としての尊さの雰囲気であったりするのであって、けっして作品としての価値を見ているのではない。書家自身も、それが自分の手習いに役立つからという実践的な理由によって、書の鑑賞に赴いているのである。

小山は中華文明圏に固有の論理的 b である「書画同体」論にも斬り込んでいる。漢字の本質が象形文字であることを考えれば、書画が起源的に同一であった時代は確かにあっただろう。しかし漢字は、用いられる時代や集団の違いによって、漸次その形などが改竄されてきたシステムである。古代の漢字と、それから発達して今日に至った漢字とは、たとえ同じ文字であっても、意義・指示する事物・音が大幅にずれていることもしばしばなのだから、イメージを喚起する作用はとうに失われていると見るべきだろう、と。

そして、その結論は、人は書を前にしたとき、当の対象そのものに感動しているのではなく、書かれた **甲** に心を奪われているのだとしたことである。彼によれば、書の紙面において、誤字や判読不能な文字が登場することは決定的な打撃である。なぜなら、詩文が含み持つ意味の円満な受容において、初めて人の心は感情を生じるのだから。その証拠に、拙い文字であっても、「名文、名句」を記録すれば、必ず書の受け手を感化するとまで言っている。ここまで来れば、書の正体は文学作品であると主張しているに等しく、鑑賞者ならぬ「読者」だけが書の前にいるということになるであろう。

このような「書ハ美術ナラズ」論に対しては、同時代において敏感な反応を示した岡倉天心の言葉ならずとも、その意見に逐一反論を述べる余地がある。だが、小山の言説が今日においてもなお一定の評価を保っているのは、書に対する本質的な疑問、あるいは書を根本的に論じるときに必須の論点が提出されているからではないだろうか。先に整理して記述した事柄の他にも、彼は、書につきまとう模倣の性格の問題、一枚の作品が一瞬で成立し、作家の苦闘が全く欠けて見えることへの疑問、漢字の知識がなくては評価ができず、表現が普遍的性格を欠くように思える点など、興味深い指摘を残している。

しかし、小山が示したうちで最も重要な論点とは、イメージと言語の根深い二項対立の問題である。彼は、同じ論考の中で、日本における最初期の有力美術団体である龍池会が主催した講演会において、いわゆるお雇い外国人で、ヘーゲル美学を信奉するアーネスト・フランシスコ・フェノロサが、「書画」を美術の範疇で語ったことについて強い憤りを表明している。彼が擁護したかったのは、国家に対し強い発言権を持つフェノロサや岡倉天心が、東洋的な美術を大々的に評価する中で劣勢に立たされていた洋画壇の勢力だとも言われる。したがって、ここに言う「図画」とは、ほぼ黎明期の洋画にその意が重なりと察してもよいだろう。この頃の洋画に抽象画は存在しない。よって、小山の言説は、絵画は具象を描いたイリュージョンによって鑑賞者の視覚を眩惑するところに、その最大の効用があるというパラダイムを脱していない。「書ハ美術ナラズ」は、今日から見れば具象画家の言い分として相対化できるのである。

ところが、現代の美術には抽象絵画が存在し、小山の視野をはるかに超えた地点で、イメージの純粋な作用が問われてきた歴史の蓄積がある。そうした実状の中から書を改めて見直すとき、これは、具象絵画ではなく、むしろ抽象絵画の造形と対比し得る表現の領域であるという、新たな論が成り立つのではないだろうか。書は、人跡未踏の地や想像上の文物を眼前に髣髴させることはないにしても、線の姿態や文字の形象によって、純粋なイメージを伝える可能性を持つからである。

そして、文字をどのようにイメージと並置し、調和させるかという課題は、数多の近現代美術作家たちが受け継ぐ問題意識でもあった。試みに西洋から事例を探してみると、キュビズム時代のピカソの作品とミロの抽象絵画とは、両者の芸術的主張の相違にしたがって、それらの画面の様式を異なったカテゴリーの中に枠づけることが美術史の常道だが、虚心に双方の表現を見比べてみると、文字が重要な主題の一つとして探求されているところから、本質的な類似を指摘することもできる。抽象

的な事物や形態に隣接して、アルファベットが丹念に描き込まれた画面は、日常的な自然風景や生活場面の痕跡を捨象して得られたはずの彼らの絵画空間の性格を、再び卑近な意味作用や造形の上に引き戻す効果を持っている。ピカソのキュビズムは、西洋絵画における客観的描写の伝統を解体し、より深い視覚の真実に到達しようとするし、ミロの抽象も、従来の美術が追求する現実把握の方法を脱出して、新しい次元でのイメージの捕獲を目指そうとするが、文字の介在によって、純粹抽象の觀念へ上昇するコースからは微妙にはみ出していく。意味の指示対象を持つ記号を描画のモチーフとしたことは、一言で述べれば、超越的でもあり、c 的でもある両義的な空間の創出につながっている。

大局的に見れば、近現代の西洋では、イメージを中心に組み立てられた造形芸術の歴史の内部から、その文脈を掘り崩すようにして、觀念を直接に呈示する文字という媒体への関心が高まったと言える。ピカソやミロの後にも、アンディ・ウォーホルやロイ・リキテンスタインのようなポップ・アーティストが、絵画を構想する上での重要な素材として、アルファベットの単語をよりあからさまに強調したことを思い起こしておきたい。こうした一連の事象に鑑みると、もしも文字に注目した西洋の美術が、東アジアの書と積極的な遭遇を果たしたならば、そこにはどんな化学反応が生まれるだろうかと考えることはそれほど突飛な空想ではあるまい。中国を中心として、書が自律した表現活動のジャンルとして存在する国や地域では、空間と文字の關係を突きつめて考察することが芸術家のきわめて重要な課題の一つとして捉えられてきた。特に中国では、王朝時代を通して、宮廷お抱えの画院画家が描く水墨山水よりも、科擧を通過した官僚や在野の文人がしたためる書作品の方が相対的に文化の主導権を握るという伝統を長きにわたって培ってきた。ことによっては、現代でも書は絵画を上回る人気を誇っているかもしれない。また、日本では、文字文化の源流である中国の漢字が簡略化された現在の時点でも、往古の字体を生活の中に比較的正確な形式で継承し、さらにそこへかな文字の使用が重なることで、和文とその筆記に対応した、いわゆる「漢字かな交じり文の書」が豊かな繁榮を保ち続けている。漢字も、かなも、アルファベットと比較した場合に一層複雑な造形原理を宿していることは言うまでもなく、書家の手と思考はそれを芸術的な態度を以て解釈し、出力するのであるから、理論的に見て、西洋のそれよりも精緻をきわめる文字表現が過去において産み出され、現在も創造されつつあると主張することが可能である。これはすなわち、美学的な観点から確認される文字の運用価値とは何なのかを、西洋文明へ向けて積極的に解き明かすイニシアティヴを書の担い手が取ってゆくことになるかもしれないことを意味する。

(栗本高行「墨痕 書芸術におけるモダニズムの胎動」による)

B

I 書ハ美術ナリト称スル人ノ説ニ曰ク、本邦ノ書ハ歐洲饒行文ト異ナリ、美術ト云フベシト。是レ誤謬ノ第一ナルモノ也。夫レ書ハ固ト言語ノ符号ニシテ、他ニ作用アルニ非ズ。上古ノ世、人民音聲ニ因テ言語ヲ作り、互ニ意ヲ通ゼシモ、言語ハ一場ニ止マリ、遠隔ニ達スル能ハズ。於此已ムヲ得ズ之ガ符号ヲ作テ、之ヲ久遠ニ達ス。書ハ即チ此符号ナリ。故ニ其主旨タル唯ダ意ヲ通ズルニ在ルノミ。書ニシテ誤リ無ク意ヲ通ズルヲ得バ、則チ書ノ職分畢レリ。

II 夫レ書ハ他ノ美術ノ如ク独立シテ作用アル者ニ非ズ。必ズ文句ノ指揮ニ従ヒ、然後始テ作用アル者ナリ。若シ文句ノ指図ニ従ハズ、文字ノ形ヲ記セシノミニテハ、如何ニ巧ニ多数ノ文字ヲ書スルトモ何ノ用ヲモ為サザルナリ。故ニ前数々述ブル如ク、其本分ノ作用、即チ言語ノ符号トシテ意ヲ通ズルノ外、復タ他ニ作用アル者ニ非ズ。図画ノ其精妙奇功ヲ以テ或ハ暴逆ナル、或ハ慘忍ナル、或ハ慈仁ナル等ノ千状万態ヲ吾人ガ眼前ニ呈出シ、吾人ヲシテ驚エズ恐怖セシメ、憤怒セシメ、尊敬セシムルノ類ニ非ズ。如何ニ能書ナリトモ、看者ヲシテ泣カシメ笑ハシメズ。故ニ人心ヲ感動シ教化ヲ助クルトノ作用ハアラザルナリ。又図画ノ春晚田家ノ景ヲ写シテ看者ノ精神ヲ鳥花香ノ間ニ飛遊セシメ、渺茫タル蒼海ヲ画テ看者ノ心神ヲ開濂シ、泉下慈親ノ容貌ヲ座右ニ置テ敬慕ノ情念ヲ保持セシメ、臥シテ海外万里ノ名山勝地ニ漫遊セシメ、座シテ千百年前ノ戰亂争乱ヲ目撃セシメ、遠隔ノ知友ニ對セシメ、往時ノ英傑ニ謁セシメ、昇平豊年ノ景況親族熟和ノ状態ヲ画テ看者ヲシテ驚エズ欲喜セシムルノ類ニ非ズ。

III 如何ニ能書ナリトモ、人ノ精神ヲ快樂ノ別天地ニ誘ヒ、吾ヲ忘レテ欲喜セシムル等ノ事ハ為ス能ハズ。故ニ人心ヲ慰メ、之ニ快樂ヲ与フトノ作用モ亦アラザルナリ。又図画ノ、古今ノ風俗ヲ一日間ニ歴観セシメ、各地ノ風景ヲ、一室内ニ集覽セシメ、滄溟深淵ノ妖魚毒虫深山幽谷ノ猛獸怪禽ヲ眼前ニ置テ徐ニ觀察セシメ、其身寒風ヲ凌ガズシテ凜烈タル北地ノ氷山ヲ探リ、其身危險ヲ踏マズシテ瘴毒ナル蠻人ノ巢窟ヲ窺ハシメ、万物至大ノ形象ヲ尺寸ニ納メ、至細ノ幽微ヲ方寸ニ充タシメ、能ク言語ノ及バザル所ヲ表出シ、人ヲシテ一見然タラシムルノ類ニ非ズ。如何ニ能書ナリトモ、唯其文意ヲ看者ニ通ズルノミ。書自身ハ一ノ意味ヲモ有セズ。故ニ能書タリトモ拙書タリトモ同一ナル一語ヲ書スレバ、読者ニ同一ナル意味ヲ會得セシメ、絶テ他ノ意味ヲ會得セシメズ。

目ヲ慰ムルノ作用アリト。

②

然ドモ細ニ觀察セバ自ラ其非ナルヲ悟ルベシ。

③

凡ソ物ノ精ナル者功ナル者粗ナル者拙ナル者ニ比スレバ、人ノ嗜好ニ適シ多少心目ヲ悦バシムル者ナリ。

者拙ナル者ニ比スレバ、人ノ嗜好ニ適シ多少心目ヲ悦バシムル者ナリ。

④

故ニ書ト雖トモ亦巧ナル者ハ多少人目ヲ慰ムベシ。

是レ固ヨリ至当ノ事ナリ。余モ亦夙ニ書ヲ好メリ。故ニ能書ニ遇ヘバ多少目ヲ悦バシム。然レドモ若シ一字ヲ習ハズ一字ヲ讀マザル者ニ示サバ則如何。必ズ少シモ其人ヲ慰メザルベシ。故ニ能書ノ吾人ノ目ヲ慰ムルハ、是レ吾人ガ嘗テ書ヲ學ビシニ由ルナリ。饒行文ノ巧ニ書セシ者、之ヲ習ヒシ人ノ目ヲ慰ムルト同一ノ理ニシテ、別ニ作用アリト云フ程ノ事ニハ固ヨリ非ザルナリ。由此觀之バ、其本分ノ功用、即チ文句ノ指揮ニ従ヒ言語ノ符号トシテ意ヲ通ズルノ外、又他ノ作用アラザル事明白ナリ。而シテ其本分ノ作用ハ饒行文ト同一ナレバ、本邦ノ書ハ饒行文ト異ニシテ独リ美術ノ作用アリトハ斷ジテ言フベカラズ。

(小山正太郎「書ハ美術ナラズ」による)

問一 Aの文章における空欄 a b c に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | |
|---|---|----|---|-------|---|-----|
| イ | a | 縁故 | b | スタイル | c | 超現実 |
| ロ | a | 時節 | b | コース | c | 具体 |
| ハ | a | 機縁 | b | スキーム | c | 形而下 |
| ニ | a | 奇遇 | b | カルチャー | c | 論理 |
| ホ | a | 契機 | b | ドグマ | c | 絶対 |

問二 Aの文章における傍線部1「書の正体は文学作品である」と述べた根拠は、Bの文中の波線部イ、ホのどれに該当するか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 言語ハ一場ニ止マリ、遠隔ニ達スル能ハズ。
ロ 必ズ文句ノ指揮ニ従ヒ、然後始テ作用アル者ナリ。
ハ 入ラシテ一見猥然タラシムルノ類ニ非ズ。
ニ 書自身ハ一ノ意味ヲモ有セズ。
ホ 故ニ書ト雖ドモ亦巧ナル者ハ多少人目ヲ慰ムベシ。

問三 Aの文章における傍線部2「具象画家の言いつとして相対化できる」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 東洋の美術が高く評価される中で、洋画家は劣勢に立たされていたため、洋画の地位を高める目的の発言だと思えば共感できる。
ロ 絵画の美とは文字を知らない人々をも感化すべきものであるため、識字を前提とする書とは正反対の概念であると理解できる。
ハ イメージと言語は解消しがたい二項対立概念であるため、書がどちらに属するか比較対照することで、美術と言えるか判断できる。
ニ 当時はまだ抽象画が存在しない時代であるため、具象画に基づき美術の範疇を規定すれば、書を美術と認めない根拠も理解できる。
ホ 当時は西洋画受容の黎明期で、美術の概念が確立していなかったため、他の意見と比較してどれが間違っているとは言えない。

問四 Aの文章における空欄 甲 に入る最も適切な漢字二字を、Bの文章中のⅡの段落から抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問五 次の一文が入る最も適切な箇所を、Bの文章における空欄 ① ② ③ ④ から一つ選び、解答欄にマークせよ。
是レ蓋シ世論ノ迷霧ニ陥リシ道路ナリ。

問六 Bの文章の趣旨に合致しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 美しい文字には、字を習わぬ人にも心を慰める作用がある。
ロ 文字には、精神的な快楽や歓喜を与える機能は期待できない。
ハ 文字とは、究極的にはメッセージの運搬具にすぎないといえる。
ニ 西洋の横文字にも、独自の美術的な価値があるとは認められない。
ホ 美しい文字も下手な文字も、意味を伝えるという働きでは同一である。

問七 AおよびBの文章の趣旨と合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ Bの文章では、書を絵画としては認めているが、Aの文章では書を現代の抽象絵画の造型にも通じる表現領域と考えている。
ロ Bの文章では、文字を言語の「符号」としてのみ捉えているが、Aの文章では文字の本質を抽象的な造型表現にあると考えている。
ハ Bの文章では、文字とイメージの結びつきが否定されているが、Aの文章ではその可能性が東洋から西洋の美術にも及ぶと考えている。
ニ Bの文章では、漢字もアルファベットも美術たり得ないと主張しているが、Aの文章では象形文字の漢字については美術として鑑賞の対象になり得ると考えている。
ホ Bの文章では、書は言語の意味を誤りなく伝達することにあると断定しているが、Aの文章では誤字や誤記こそ現代芸術としての書の積極的役割があると考えている。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ブックデザイナーとして独立して以来、仕事場と住まいを接近させたため、通勤電車に乗りなくなっておよそ二十年になる。それでもときおり、たとえば古書展など「早い者勝ち」の催し物の際には満員電車に乗りあわせることがあり、神経がひどく疲れる。つぎの駅で降りたくてモゾモゾしていると、前にいる人から「あわてなくてもだいじょうぶですよ」とたしなめられる。

イ 見知らぬもの同士がかなりの時間、毛穴が観察できるほどの距離でいる、という体験はトクイなものだろう。映像で見る「メッカ巡礼」や、かつてのデモ行進などでも、「見知らぬもの同士」が同じように密着するのだが、その「見知らぬもの同士」のあいだには、共有する礼拝対象や目標がある。都内の三大祭とやらをテレビが映すことがあり、神輿を担いでいるひとたちが、地元民ばかりではなく、多くは各地から駆けつけてきているように見える。そこでは共同体の氏神が共有されているとは思えず、「見知らぬもの同士」の密着でしかない。

満員ではなく、かといって空席があるほどではない夕方の電車内のことだ。扉のそばで雑誌を読んでいると、ある駅で、男女ふたりずつの四人連れが乗車してきた。同じ会社の人間らしく、同僚や上司のだれれさんがどうした、と話が盛りあがるにつれ、四人が等距離をとり、きれいな輪を描くようになった。

ハ その結果、電車が揺れるたびに男は背後のわたしに密着してきたのだ。たまたま、そこから数歩離れると、こんどは別の女が接近してくる。両者とも、知り合いの四人が形成する等距離の輪にはきわめて鋭敏で、ひとりが少し位置をずらすとすぐにみながポジションの修正にかかるというぐあいなのだ。背後にいる「見知らぬ」わたしを、物体と見なしたかのようだった。

エドワード・T・ホールがティショウした概念に「プロクセミクス (proxemics)」がある。「個体間距離」とも訳されることがあるこの考えによれば、人間は他者との関係に応じた距離をとり、たとえば恋人や夫婦のごとく、知りあうほどに距離がせばまっていく。この法則は、生物一般にも当てはまるのだろうか。だが、電車内の四人がつくり出す「知り合いの輪」の光景は、知り合い同士においては厳密な距離が保たれ、見知らぬ人間においては無いものとされる、といった新たな法則を感じさせた。「プロクセミクス」は、「知らない」から「知っている」ことへの、ゆるやかなグラデーション総体を言い当てるものだったが、いまや、「知らない／知っている」の二分法のもとで、
I が排除された距離感覚が生じているのかもしれない。伝統的にみえる都会の祭が、満員電車状態の現在の再現だったとしても、見知らぬ人間に
II ということ意識している。

『脳内汚染』(岡田尊司著)が、教師や生徒に向けて八発の銃弾を放った十四歳のマイケル少年のようすを伝えている。それまでハンドガン撃ったことがないマイケル少年は、一歩も動かずに、ひとりに一発ずつの銃弾を見舞ったのだという。暗殺者に関するドキュメンタリーなどを読むと、ターゲットに対する発砲は二点射が原則と出てる(たとえばジョージ・ジヨナス『標的は11人 モサド暗殺チームの記録』新庄哲夫訳)。なぜ一発なのか。『脳内汚染』は、一回ずつしか撃ってはいけない「ゲームの規則」によるのだと言う。「標的ゲーム」への熟練のために、射撃したことのない少年が、そこから動かずに、一発ずつを発射し、多くの犠牲者を出した。

ホ
ゲームが脳内汚染の原因かどうかはともかく、ゲームの視界が、一点透視図的世界を強烈に現出させているのは、想像ができる。複数のプレイヤーがいるにしても、遠近法同士の集合であることに変わりはない。3DやCGと呼ばれる技術も、へだれがどこから見ているのかとの透視図である。視覚世界にかぎってみても、言ってみれば天動説から地動説への道筋とは逆転した、「へわたし」を中心とした世界観への反転が起きているようなのだが、ふと自分の背後にうそ寒さを感じる。日常的に使われる軍用語のあまりの多さと思う。戦略、戦術、潜水の陣、一撃離脱、最前線、打撃を与える……、これら軍用語を使わずに文章を書くこととするのだが、つい紛れこむ。「第一線」とかだ。物流ということばにも、「logistics」兵站」との軍事的の匂いがする。あるいは、DTPでの色彩調整に「キャリブレーション」ということばをよく使うが、これも原義は「銃砲の口径測定」や「着弾修正」だ。そもそもコンピュータが、着弾位置予測や暗号解読の目的で発達してきたと聞くと、インターネットの蜘蛛の巣のネットワークも、はじめは軍用に危機分散を目的に開発された技術だとの話を思い出す。ゲームよりはるか以前に、「戦争」によってわれわれの脳内は十分に汚染されているのではないか。戦争は、だがどこから見ているのかの視点に立ち、「知らない」敵、「知っている」味方を峻別するのではなかったか。日常に浸透した軍用語の多さとともに考察してみなければならぬものに、「性的」な用語があるかもしれないが、別の機会にゆずろう。「エゴ」
としてあることが肯定されている存在「消費者」とは、世界を一点透視図的に見ることが許された人間である。わたしという消費者は、「射撃をしたこともないのに、そこから動かずに、一発ずつを発射し」ているのではないか。

(鈴木一誌「ゲームの規則」による)

問八 次の文は本文中に入るべきものである。空欄イ、ホから最も適切な箇所を一つ選び、解答欄にマークせよ。

年季がちがうのだ。

問九 傍線部 A「無いものとされる」ものとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 「個体間距離」の現在そのもの
- ロ 「個体間距離」の前提そのもの
- ハ 「個体間距離」の経験そのもの
- ニ 「個体間距離」の総体そのもの

問十 傍線部 B「新たな法則」を具体的に示している文を、本文中より四十文字以内で抜き出し、その最初と最後の四字をそれぞれ記述解答用紙の所定の欄に記せ（句読点等も一字として数える）。

問十一 空欄

I	II
---	----

 に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ I 知らない II 見られる
- ロ I 知らない II 知られる
- ハ I 知っている II 見られる
- ニ I 知っている II 知られる

問十二 傍線部 C「一点透視図的世界」とはどのような世界か。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 「ゲームの規則」に脳内が汚染された世界
- ロ 「だがどこから見ているのか」が問われる世界
- ハ 「わたし」が別の中心になる世界
- ニ 「わたし」を不動の中心として持つ世界

問十三 傍線部 D「ふと自分の背後にうそ寒さを感じる」のはなぜか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 「一撃離脱」や「最前線」といった軍事用語が日常に多く浸透していることに気づいたから。
- ロ 「見知らぬ」者が「個体間距離」を破っていつの間にか自分の背後にいることに気づいたから。
- ハ 自分もふくめ、多くの人々が知らぬ間に「戦争」の特性に二重に汚染されていることに気づいたから。
- ニ 「戦争」を知らない者までがテレビ・ゲームを通して「戦争」的な感覚にまみれていることに気づいたから。

問十四 本文の趣旨と合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 仕事柄ふだん満員電車に乗ることのない筆者は、たまにこれに乗り合わせると、状況に応じてうまく「個体間距離」を修正できない。
- ロ 都会の祭に参加する人々と満員電車に乗り合わせる人々は、ともに「見知らぬ」者同士だが、両者には根本的な違いがある。
- ハ テレビ・ゲームで射撃に習熟した少年がそれを真似るように現実には「見知らぬ」人を射撃したことは、地動説と関連している。
- ニ 「エゴ」という一点透視図的な中心を抱える消費者の購買行動は、地動説と同じような視点に立っていると見なすことができる。

問十五 傍線部 1・2 のカタカナの部分の漢字に直し、記述解答用紙の所定の欄に記せ（楷書で丁寧に書くこと）。

(三) 次の甲・乙・丙の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

甲「次の文章は、西郷信綱著『古代人と夢』（一九七二年刊）の一節である。」

かつて夢がどのように信じられ、どんな風に機能したかを知るため、具体例をまずここに一つ提示しておこう。それは『今昔物語集』の「信濃国王藤観音出家語」（巻十九第十一話）という話で、『宇治拾遺物語』と『古本説話集』にもほぼ同文のものを載せている。要約しようとかかったけれど、話の面白味が台なしになるし語気も伝わらなくなるので、左に結語を除き全文をかけることにする（但し表記のしかたは多少改変した）。

今は昔、信濃国、 の郡に の湯と云ふ所あり。諸の人、薬湯なりとて来りて浴る所の湯なり。

しかる間、その里にある人、夢に見るやう、人來りて告げて云はく、明日の午時に観音來り給ひて此の湯を浴み給ふべし、必ず人結縁し來るべしと。この見る人問ひて云はく、いか様な姿して來り給はむとするぞと。告ぐる人答へて云はく、年四十ばかりなる男の鬚黒きが、綾蘭笠を着て、節黒なる大胡録を負ひて、革巻きたる弓を持ちて、紺の水旱を着て、夏毛の行騰、白足袋を履きて、黒造の大刀を帯きて、華毛の馬に乗りて來る人あらば、それを必ず観音と知り奉るべしと告ぐるを聞くと思ふ程に、夢覚めぬ。驚き怪んで、夜明けて後、普くその里の人にこの事を告げ廻らし、語り聞かしむ。

然れば此を聞き次ぎて、この湯に人集まる事限りなし。忽ちに湯を替へ、廻の庭を掃除し、注連を引き、香花を備へて多くの人居並みて待ち奉るに、日漸く午時傾きて未に成る程に、かの夢に見つる様な男來りたり。顔より始めて夢に云ひつる様に露違ふ事なし。諸の人に向ひて、こは何事ぞと問へども、ただ礼拝のみして、この事を語る人なし。一人の僧ありて、手を摺りて額にあて礼み居たる所に寄りて、男、こは何事に依りて己を見て万の人は礼み給ふぞと、横なばれたる音を以て問ふに、僧答へて云はく、この過ぎぬる夜、人の夢に然々見けるに依りてなりと。

男これを聞きて云はく、己はこの一兩日が前に、狩をして馬より落ちて、左の方の脇を突き折りたれば、それを茹でむが為に來りたるを、かく礼み合ひ給ふこそ怪しと思ゆれなど云ひて、とかく行くを、万の人、後に立ちて礼みのしる。男侘びて、我が身は然れば観音にこそ有るなれ。同じく我法師と成りなむと云ひて、その庭に弓箭を棄てて、兵杖を投げて、忽ちに鬚を切りて法師と成りぬ。かく出家するを見て、万の人貴び悲しむ事限りなし。

しかる間、おのづから此の男の知りたる人出で來りて見て云はく、彼は上野の国に有る王藤大主にこそあるめれと云ひければ、万の人これを聞きて、名を王藤観音とぞ付けたりける。出家して後、比叡の山の横川に登りて、覚朝僧都と云ふ人の弟子に成りて有りけるが、五年ばかり横川にありて、その後は土佐の国にぞ行きにける。その後、その有様を伝へ聞きたる人なし。

しかしかの格好の男が明日この湯にやってくる、それが観音だ、というある里人の夢がたちまち村中にひろまり、狩で落馬した傷を癒した湯治にやつて來た男を、みんなして観音と信じこんでひたすら礼拝する。この圧倒的な力にとりかこまれ、その男の方も「我が身は然れば観音にこそ有るなれ」といいその場で出家してしまう。夢がすばやく己れを實現し、「横なばれたる」坂東声の男がそれこそ夢のように観音に自化していくさまが面白くたたられている。

この話につき、南方熊楠が例の調子で痛快な評言を下している。「星移り時更りて、観音と言われて自身を観音と確信する人こそ現代にならめ。色男と呼ばれて、鏡と相談もしないで、自分を色男と有頂天になって確信する者は、滔々みなこれだ。確信する物が時と共に変わったばかり、確信が古えと今とその力を異にするのではない。また次のようにもいつている、「東西人とも多分は、現代の世相人情を標準として、昔の譚を批判するから、少しも思いやりなく、一概に古伝旧説を、世にあり得べからざる仮托虚構でデッチ上げた物と断ずる」と。

この「思いやり」は事象を時代の文脈そのもののなかで見ること、 I 想像力という言葉におき変えることもできる。これはしかし、たんに過去と現代との間にあてはまるだけでなく、夢と覚醒との関係にもあてはまる。夢を覚醒時の意識で以て他の何ものかに因果的に還元してはなるまい。夢はまさしく夢として現実なのであって、部分的覚醒ではないからだ。仏法のありがた味を説くための方便説話ではあるが、かくしてここには夢を信すべきものとした文化の一つの型が示されているといえる。

『源氏物語』えがくところの明石入道なる人物の生態をみても、その間の事情を知ることができる。彼の秘藏娘明石の上は須磨に流謫中の光源氏と逢う、そしてその間にできた姫（明石中宮）は春宮に入内し、程なく男子が誕生する。こうして明石入道は、かく大願成就の上は極楽往生疑いなしと娘（明石の上）に最後の消息を送る。その消息文で彼は、娘が胎中にはらまれている年のある二月の晩見た夢の一件をあかす。それは次のような夢であった。

身づから、須弥の山を、右の手に捧げたり。山の左右より、月日の光さやかにさし出でて、世を照らす。身づからは、山の下のかげに隠れて、その光にあたらず、山をば、広き海に浮べおきて、小さき舟に乗りて、西のかたをさして漕ぎゆく。

（若菜上）

これは吉夢である。『花鳥余情』は、物語の筋にそくしてこの夢を次のように解いている。須弥山は世界の中心の山、それを「右の手に捧げた」とある「右」は女、すなわち明石の上をさし、「月日の光さやかに云々」は、月を中宮に日を春宮にたとえたもの、「山の下のかげに隠れて」は、当の入道が榮達を遂げて明石に通世するをいい、「山をば、広き海に云々」は、

春宮が帝位につき四海を保つのをほめかし、「小さき舟に乗りて、西のかた云々」は、生死の海をこぎ渡り極楽往生する意。少しうまくできすぎているように思えるのは、物語の一部として考案されたものだからである。しかしフロイトのいうとおり、文芸作品中の夢は時代の人々の夢と本質的には対応するのであつて、必ずしも特例でない。果して『蜻蛉日記』に、両手に日月をうけ、月をば足にふみ、日をば胸に抱く、と夢みたという記事が出てくるのである。

入道の夢の一件を大願成就した後であかすようにしたのは、作者の手柄である。もしもこれを最初にかたり、万事その夢のとおりを実現したという具合になっていたら、おそらく『源氏物語』のこの部分は説話文学になり終つていたことだろう。それにもかかわらず、見た夢を信じるという点で、『今昔物語集』の説話と『源氏物語』——というよりその作中人物——は、ほぼ同じ世界を呼吸していることがわかる。

注 □の郡・□の湯……郡名・温泉名を後で記そうとしたための欠字。 注連……しめなわ。

南方熊楠……一八六七—一九四一。博物学者・民俗学者。本文は「自分を観音と信じた人」による。

須弥の山……仏教の世界観で世界の中心にそびえる山。

『花鳥余情』……室町時代の『源氏物語』の注釈書。

乙「次の文章は、甲に言及される『蜻蛉日記』下巻の一節である。」

十七日、雨のどやかに降るに、方塞がりたりと思ふこともあり。世の中あはれに心細くおぼゆるほどに、石山に一昨年詣でたりしに、心細かりし夜な夜な、陀羅尼いと尊う読みつ、礼堂にをがむ法師ありき。問ひしかば、去年から山ごもりして侍るなり。穀断ちなりなど言ひしかば、さらば祈りせよと語らひし法師のもとより、言ひおこせたるやう、いぬる五日の夜の夢に、御袖に月と日とを受けたまひて、月をば足の下に踏み、日をば胸にあてて抱きたまふとなむ、見てはべる。これ夢解きに問はせたまへと言ひたり。

いとうたておどろおどろしと思ふに、疑ひそひて、をこなるこちすれば、人にも解かせぬ時しもある、夢あはする者来たるに、異人の上にて問はすれば、うべもなくいかなる人の見たるぞ、と驚きて、みかどをわがままに、おほしきさまのまつりごとせむ者ぞといふ。さればよ、これがそらあはせにあらざ、いひおこせたる僧の疑はしきなり。あなかも、いと似げなしとて、やみぬ。

注 石山……滋賀県大津市にある石山寺。 陀羅尼……梵語を音写した呪文。

穀断ち……穀物を断つて修行する者。

丙「次の文章は、甲に引用される『源氏物語』若菜上、乙『蜻蛉日記』の、夢の典拠とされる『過去現在因果経』の一節である。」

爾時、善慧比丘、白普光如来言、世尊、我於昔日、在深山中、得五奇特夢。一者夢臥大海。二者夢枕須弥。三者夢海中一切衆生入我身内。四者夢手執日。五者夢手執月。唯願世尊、為我解說此夢之相。

爾時、普光如来、答言、「善哉。汝若欲知此夢義者、當為汝說。夢臥大海者、汝身即時在於生死大海之中。夢枕須弥者、出於生死得般涅槃相。夢大海中一切衆生入身内者、当於生死大海為諸衆生作歸依处。夢手執日者、智慧光明、普照法界。夢手執月者、以方便智入於生死、以清涼法化導衆生、令離惱熱。以此夢、I、是汝将来成仏之相。善慧聞已、歡喜踊躍、不能自勝、礼仏而退。」

注 世尊……仏。ここでは普光如来のこと。 般涅槃……完全な悟り。

方便智……衆生を導くための智慧。

清涼法……絶対的境地。

化導……教化し導く。

問十六 甲の文章における波線部 a、f のうち、助動詞を二つ選び、解答欄にマークせよ。
イ 依りてなり □ 思ゆれ ハ 成りなむ ニ 出家する ホ 悲しむ ヘ 行きにける

問十七 甲の文章における傍線部 1 「確信が古えと今とその力を異にするのではない」とあるが、この意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 現代においても、鏡をよく見もしないで色男と呼ばれて勘違いする者がいるように、確信する力というのは古今において同じである。
□ 現代においては、鏡があるので色男と呼ばれても勘違いする者が少ないため、確信する力というのは古今において全く同じではない。
ハ 過去においては、観音と言われて自分自身を観音と思い込む人がいたが、現代においては、そのように確信する人がいるはずがない。
ニ 過去においては、観音と言われて自分自身を観音と思い込む人がいたが、現代においても、そのように確信する人がいる公算がある。
ホ 現代の世相人情を標準として昔の話を批判する者は、少しも思いやりがなかったために、確信の力をあり得ないものとして排除しがちだ。
ヘ 古えの伝承をあり得ないものと確信する現代人は、実は過去に捉われてしまっているので、確信の力は古今において同じとみられる。

問十八 甲の文章における空欄 I に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 覚醒的 □ 方便的 ハ 現実的 ニ 歴史的 ホ 夢想的 ヘ 確信的

問十九 甲の文章における傍線部 2 「夢はまさしく夢として現実」とはどのような意味か、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 覚醒状態の意識において、夢をそのまま現実として認識することはあり得ない。
□ 夢と現実の因果関係は歴史的に証明されており、現実反映されることがある。
ハ 覚醒時に夢は見ることでできないので、夢と現実とは明らかに異なるものである。
ニ 過去と現代において、夢の真偽についての認識は、実はあまり変化していない。
ホ 部分的に覚醒している状態においては、夢を現実のものとして勘違いしやすい。
ヘ 夢は夢の中でのみ真実であり、夢の迫真性は覚醒時のそれとは別のものである。

問二十 甲の文章における傍線部 3 「蜻蛉日記」よりも前に成立した作品を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 『梁塵秘抄』 □ 『古今和歌集』 ハ 『狭衣物語』
ニ 『方丈記』 ホ 『紫式部日記』 ヘ 『和漢朗詠集』

問二十一 甲の文章における傍線部 4 「ほぼ同じ世界を呼吸している」と同様の意味を述べる箇所を、甲の文章中から二十五字以内で求め、そのはじめと終わりの四字を抜き出して、記述解答用紙の所定の欄に記せ（句読点等が含まれる場合は、それらも一字とする）。

問二十二 乙の文章の内容と合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 一昨年、石山寺に参詣した作者は、心細い思いで毎晩自ら陀羅尼を読んでいた。
□ 作者が石山寺で祈禱を依頼した法師は、自らが見た夢の内容を言つてよこした。
ハ 作者は、法師からの報告を受けて、たちどころに「夢解き」に夢あわせさせた。
ニ 作者は、法師が伝えた夢の内容があまりにおおげさなため、疑いの念を抱いた。
ホ 「夢解き」は、石山寺の法師がゆくゆくは政界を牛耳ることになると予言した。
ヘ 「夢解き」の夢あわせについて、作者はひどくいい加減な解釈だと受けとめた。

問二十三 丙の文章における傍線部5「当於生死大海為諸衆生作帰依処」につける返り点として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 当_レ於_二生死大海_一為_二諸衆生_一作_二帰依処_一
- ロ 当_レ於_二生死大海_一為_二諸衆生_一作_二帰依処_一
- ハ 当_レ於_二生死_一大海為_二諸衆生_一作_二帰依処_一
- ニ 当_レ於_二生死大海_一為_二諸衆生_一作_二帰依処_一
- ホ 当_レ於_二生死大海_一為_二諸衆生_一作_二帰依処_一
- ヘ 当_レ於_二生死大海_一為_二諸衆生_一作_二帰依_一処_上

問二十四 丙の文章における空欄Ⅱに入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 解脱 ロ 想念 ハ 大海 ニ 光明 ホ 因縁 ヘ 生死

問二十五 甲・乙・丙のいずれかの文章の趣旨と合致するものを、次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 信濃国の温泉に現れた男が、集団的妄想にとらわれた人々に騙されて出家すると、雲集した人々は手のひらを返したように感動して落涙した。

ロ 出家した男は、観音菩薩の化身として拝まれ、比叡山の横川で修行していたが、周囲の大きな期待に耐えられずに失踪してしまった。

ハ 明石入道は、娘が胎中にいた際に見た一夜の夢を確信して、娘の成長を待ち続けたものの、孫に女子が誕生したため大願成就の見込みがはずれてしまった。

ニ 『源氏物語』の山の左右より月と日が出る夢と、『蜻蛉日記』の袖に月と日を受けた夢は、ともに権力を手にする意味に解されるが、『過去現在因果経』では権力の象徴という表現はない。

ホ 『源氏物語』は説話文学ではないので、夢についての解釈の位相が異なり、将来的に極楽往生するというような、あり得ないような物語を作りやすかった。

ヘ 普光如来は、善慧比丘の問いに答え夢解きしたが、その内容は将来仏になることができるという内容だったため、比丘は大いに喜び如来を礼拝して退いた。

〔以下 余白〕

